

「異文化コミュニケーション・入門」

池田理知子 E・M・クレーマー 著 有斐閣アルマ

2000年9月 1800円＋税

久保田真弓

関西大学

異文化コミュニケーションに関する入門書は、数多く目にするが、「異文化コミュニケーションは自分探しの旅である」というスタンスから書かれた本書の構成は、少し他と違うものになっている。

本書は、4部構成になっており、1部「アイデンティティとコミュニケーション」では、他者との違いに気づいたときに自分のアイデンティティに気づかされる、という章から始まる。つまり自己と他者との違いを理解するためには、自分について知ることが大切であり、それには、他者とのコミュニケーションが不可欠であるという。そして自己を形成する文化についてコミュニケーションとの関係から解説している。特にコミュニケーションは「地平の融合」という観点から、異文化コミュニケーションは、その異なる部分が大きい地平同士が融合するプロセスであると捉えている。そして2部「空間・時間・言語と『故郷』」では、文化融合のプロセスとして、自己やアイデンティティを生み出す「場」および「故郷」の創出について解説している。具体的には、文化を構成する基本的要素である空間および時間の認識、言語の複雑な力について説明している。さらに3部「異質性と向き合う」では、文化融合のプロセスでみられるダイナミズムについて、カルチャー・ショック、価値・規則と異文化接触、コミュニケーション能力と相互理解をトピックスとして取り上げ、考察している。最後の4部「マスメディア・グローバリズム・アイデンティティ」ではグローバリゼーションによるアイデンティティの画一化という負の部分に焦点を当て、その対抗策として、多様性がもたらす活力をあらためて見直し、「異質性を楽しむ」態度の大切さを検証している。

さらに本書の根幹をなしているのは、比較文明・文化学者]・ケブサーの意識構造理論を援用して紹介されている3つの代表的な意識構造とコミュニケーションの関係である。具体的には、マジックな世界、神話的世界、記号的世界の3つで、これらとの関係で空間、時間、言語などにみられる現象を読み解いている。

マジックな世界とは、文化人類学者がいうところの「アニミズム」であり、自然と一体化した生活で、精霊や神々も自然の中に宿っている世界をさす。そこでは、言葉は物そのものであり、物とそれが意味するものといった分化が起こっていない。しかし神話的世界では、指示と指示されるものに距離が生まれ、精霊や神そのものより、それらをシンボリックに象徴する偶像などを持つようになってくる。そして人の手の届かないところへ行ってしまった神との媒介をする牧師や僧侶が生まれ、次第にそれらの力関係が社会階層に反映していく。このような神話的世界では、「神話」に基づいた力を保持するために曖昧かつ戦略的なコミュニケーションが必要となる。しかし、記号の世界では、指示と指示されるものが完全に分離し、その関係性が恣意的なものとなるため、神話的世界で見られた感情的なつながりがなくなる。むしろ、機能が重視され、目的を果たすことがコミュニケーションにおいても重要になる。

このような3つの意識の上での世界は、重層的に存在し、突然ある世界が潜在化したり顕在化したりする。その理論が異文化接触の動的変化を説明するのに役立つと著者は主張している。

そもそも著者は、解釈学的アプローチを採っている。それは、コミュニケーション能

力の解説でもでてくる。従来のコミュニケーション能力の研究は、実用性を目的としたアプローチを採っており、比較的狭い範囲しか扱っていないと指摘している。例えば、文化融合に見る会話は、予測もつかない方向に発展し、創造性豊かな産物になる可能性がある。そのような会話を生かすコミュニケーション能力は、単純な数値化で測定することはできないと批判している。むしろ状況に応じて時にはルールを破り、新たなルールを作ることができる人が、高いコミュニケーション能力を備えた人だという。

さらに最終章では、グローバル・スタンダードが普及すると、これまでの世界の多様性が失われ、ひいてはアイデンティティの喪失につながるかと危機感を提示している。そして文化にみられる差異を活力とすることができるよう異文化コミュニケーションの有り方をもっと考えるべきであると提言している。それには過去の経験を別の解釈で見直す必要があるというのが、著者の主張である。

このように本書が、他の入門書と違う点は、構成だけでなく、パラダイムとして構成主義にのっとった著者の姿勢が垣間見られたことである。その意味で大人数の生徒を対象に一方的に知識を伝授する講義形式を主とする授業では、本書を活かしきれないと思われた。各章末にゼミナールと称して設問があることから、少人数のゼミなどでじっくり議論することが、本書で指摘された問題意識を深めるうえで大切であろう。

個人主義が集団主義かなど二元論的で固定的な見方をするのではなく、多様性を認め、そこから創造される現象を捉えられるような解釈を重視していく姿勢を教えなければならないということだろう。それには、実用性を目的としたアプローチに対して解釈学的アプローチがあると提示しただけでは不十分であろう。その点に気をつけないとまた二項対立で終始してしまうと思われた。つまり本書を有効に活用するには、授業形態というより、本書を手にした教師側のパラダイムシフトが必要なのかも知れない。その意味で、本書が異文化コミュニケーションの入門書として、

使いやすいかどうかは、大きく読者によって分かれるところだろう。

本書は、日本人とアメリカ人という2人の著者によるものなので領域や視点の広さがある。事例もアメリカと日本から挙げられており、理解しやすく配慮されている。また、写真とコラムも豊富で親しみやすくなっている。しかし、その反面、盛り込み過ぎて項目によっては、批判のみで終わり、もう少し別の解釈や説明があると助かるというところがある。また著者の主張の方向性も見失いそうになる。それが入門書の限界なのかもしれないし、読者の解釈に委ねられている点なのかもしれない。

また、文化融合の事例としては、食べ物や音楽、芸術など具体的に目に見える例が多く挙げられているが、人間の場合の事例もあるとコミュニケーションの捉え方がもう少し理解しやすくなったと思われる。著者は、人と世界のかかわりのなかで行われる絶え間ない意味付けのプロセスを重視しており、コミュニケーションのフィールド理論を提唱している。本書全体を通してなんとなく理解できるが、著者の個人的な体験がもう少し盛り込まれていると、理解しやすかったかもしれない。

アメリカ人と共著ということで一部は翻訳になっているはずだが、その違和感はない。しかし、A・H・マズローの5段階の「欲求」が「要求」になっていたのが気になった。また、シンボリックという用語は、神話の世界を指して使用しているが、本によってさまざまな使い方があるので、読者は気をつけたほうが良いだろう。

それからマジックという用語も、なにか適切な訳語があると良かったかもしれない。これだけを見ると、生徒は、どうしても絢爛なマジックショーを連想してしまうようだ。否、それがトリックだったのかもしれないが。私個人としては、青年海外協力隊に参加しガーナで活動した経験があるので、その体験を取り入れて本書を活用している。読者の経験を異文化コミュニケーションの視点から再度見直せる教科書だと思う。